九州産業大学の特色ある大学教育支援プログラムについての視察報告

新田 香織・Thomas Koch・下 絵津子

1. はじめに

ゆとり教育世代が多様な入試を経て入学してくる大学全入時代の中で、彼らへの英語教育をどう工夫するかが、全国の多くの大学の大きな課題となっている。レメディアル教育やe-learning関連の研究会・学会の活動が盛んになっている昨今、近畿大学語学教育部英語科では、平成22年度4月に向け、「近大Can-Do枠組み（Kindai Can-Do Framework）」[1)]を基盤とし、e-learningも含めた新プログラムの導入を検討している。この枠組みは、2001年にヨーロッパで設定されたCommon European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment（ヨーロッパ言語共通参照枠組み：CEFR）を参考にして作成した。CEFRは6段階のレベルに分類されているが、近大Can-Do枠組みでは、近畿大学の実情に合わせて、リスニング・スピーキング・リーディング・ライティングの4つのスキルに文法及び語彙を加えた、5つの分野をそれぞれ5段階のレベルに分類している。この枠組みを利用して、各スキルの習熟度に応じた指導を目指している。

一方、九州産業大学は、いち早くTOEIC協会と共同して「Can-Doリサーチ」[2)]を実施し、その結果に基づいた全学共通英語教育プログラムを構築している。またTOEIC Bridgeをプレイスメントテストとアチーブメントテストに使用し、教育効果が顕著に表れている。その試みが評価され、平成19年度の文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択された。以来このプログラムは全国的に非常に注目されている。

そこで、平成20年度近畿大学学内研究助成金[3)]の支援を受け、語学教育部の新田香織、Thomas Koch、下絵津子の3名が平成21年1月23日（金曜日）、九州産業大学語学教育研究センターを訪問し、九州産業大学の英語教育プログラム及び施設を視察した。教務部事務部長そして語学教育研究センター事務室長を兼任されている柴田善夫氏、語学教育研究センター常勤講師の大薗修一氏、そしてセンター事務室係長の横田治氏から、プログラムの背景や実施状況の詳細に関する説明を受け、さらにLL教室やCALL教室の見学も行った。

この報告では、まず、九州産業大学の英語プログラムを紹介し、近畿大学語学教育部の英語プログラムと比較し、今後の課題を提示する。[4)]

2．九州産業大学特色 GP プログラム

2.1　背景・実施過程

九州産業大学では、学生の基礎学力低下という状況の中で、建学の理念の一つである「実践的な学風の確立」を実現するために、平成10年に全学英語教育統合化の要望が出て、英語教育検討委員会が設置された。

平成11年には改革三点セット：①会話重視（ネイティブ教員）、②少人数能力別クラス、③統一テストが特定の学部で開始され、ネイティブ常勤講師の採用が始まった。平成14年に、この改革三点セットが全学に拡大し、平成15年に語学教育研究センターが設置された。同時に各学部からの委員からなる運営委員会も設置され、平成16年には英語教育ワーキンググループが発足した。平成17年に全学共通英語教育プログラムが成立し、全学体制が完全に確立し、現在に至っている。

2.2　取組の特性

2.2.1　数値目標の設定

プログラム開発の際、重要視されたのが数値目標の設定であった。外国語専門の学部がなく、学生の基礎学力低下や英語嫌いも目立つ中で、TOEIC では学生の差別化が困難であるとし、TOEIC Bridge を平成16年から全学の１・２年生に本格導入した。平成17年４月に新１年生2,671人を対象に「Can-Do リサーチ」を実施し、同じ学生を対象に英語プログラム受講後の平成18年１月に再びリサーチを行い、TOEIC Bridge のスコアと学生の英語運用能力の相関関係を調査した。まず TOEIC と TOEIC Bridge の相関関係から、TOEIC Bridge 140点を目標値として設定し、２年間でのレベルアップを目指している。「Can-Do リサーチ」の結果からは TOEIC Bridge のスコア別「できること」一覧表を作成し、教員・学生ともにレベルを把握しやすくしている。

学生には「全学共通英語教育学生ガイドブック」を配布しプログラム内容を説明、教員に対しては「Teachers' Guide」により、日本人教員とネイティブ教員それぞれの指導ガイドラインを定め、指導内容を明確にし、数値目標の認識に関しても徹底を図っている。

2.2.2　学部横断型習熟度別クラス編成

このプログラムでは、各学部内で習熟度別クラスを編成するのではなく、学部を横断した編成を行っている。そうすることで、より均一化されたレベルに編成することが可能になる。そして、TOEIC Bridge のスコアにより、最上級・上級・中級・初級の４つのレベルに分け、レベル別に指導内容を決定している。

例えば、平成 19 年度の文系４学部 1,866 人は 63 クラスに細分化され、最上級２クラス、上級 10 クラス、中級 22 クラス、初級 29 クラスと分けられた。同一クラスの学生はほとんどが同点もしくは２点差程度という、ほぼ学力が均一となるクラス編成が可能になっている。

2.2.3　初級クラスの指導

このプログラムでは、各レベルに対応した指導を目指しているが、全体の約４割を占める初級クラスに対する指導においては、「大学生として必要最低限の基礎的英語能力を養う」ことを目標として、「幅広い底上げ」を目指している。ここでは、次のような「三段階指導ステップ」と名づけられたシステムを構築している。

① 独自文法教科書による文法力・語彙力の徹底

② e-learning 課題学習による練習・演習

③ ミニテストによる学生の学習確認（成績の一部）

①の教科書は、学生のレベルに合わせてアルクと共同で開発したものである。その内容は、②の e-learning で利用しているアルクネット文法教材の内容と連動している。そして、③のミニテストは、各教員が作成するのはなく、e-learning 教材から出題される全クラス共通のもので、繰り返し学習で知識を定着できるように工夫されている。

2.2.4　中級・上級・最上級クラスの指導

２年次終了までに TOEIC Bridge 140 点以上という数値目標を達成するために、中級・上級・最上級のクラスでも e-learning 課題学習を行い、ミニテスト（成績の一部）の実施により、学生の学習確認を行っている。これらのレベルでは、数冊の推薦テキストから教員が選択し、期末テストも教員それぞれが作成している。

ミニテストは初級クラスと同様、あらかじめ準備された統一のものを実施しており、クラス間の統一を図っている。日本人教員もネイティブ教員もそれぞれが週１回 10 分程度のテストを行っているので、学生は週２回の授業で毎回ミニテストを受けることになる。

２年次終了時までに、TOEIC Bridge 140 点以上に到達した学生は、海外での英語研修

及び専門に関連した企業インターンシップに参加できる。費用の３分の２を大学が奨学金として支援しているが、2008 年度は 15 名が参加した。

2.3　プログラムの効果

さまざまな点で本プログラムの効果が見られる。まず、学生への効果として、e-learning と成績の一部に入るミニテストの導入により、「e-learning ショック」と名づけられている現象が起こった。LL ライブラリーの利用者延べ数の急増である。平成 14 年に 5,332 人であった利用者延べ数が、平成 18 年には 12 倍以上増え、64,321 人となった。学習時間の確保・学習習慣の定着・英語学習への動機づけという面で効果が著しい。週２回の授業で２年間の継続学習により、２年次終了時のアチーブメントテストの平均点は１年次のプレイスメントテストの点数を上回り、いわゆる２年生で英語力が落ちるという逆転現象はなくなった。つまり「目に見える効果」が示されている。

教員への効果としては、学生レベルの明確な提示により、教育目標・授業内容・方法・教材の決定を適切かつ迅速に行えるようになったことが挙げられている。

また、教員に対するアンケートも実施しているが、その結果を見ても、クラスのレベルや教材に関して 70％以上が肯定的な評価をしている。学生による授業評価アンケートも行っているが、専門科目などの教員に比べて、さらに全学平均に比べても、英語教員の評価平均値が高くなっている（平成 17 ～ 18 年度調査）。

2.4　今後の課題

平成 20 年度から段階的に実施している初級クラスの少人数化（20 人クラス）をさらに全クラスに拡充すること、初級用独自文法テキストを市販化に向けて、さらに充実させることとしている。

問題点としては、英語の履修単位数は学部によって異なり、国際文化学部以外の多くの学生は３年次以降英語を履修していない。今後は３・４年次の英語教育を専門科目と連動させてどのように充実させていくかが大きな課題であるとのことであった。学部によっては専門科目で開講されている英語関連科目があるので（付録参照）、これらの科目が English for Specific Purposes（ESP）としての指導内容及び指導方法になっているかの検証が必要であり、これには専門科目の教員の協力が不可欠である。しかし、現在のところはまだ協力体制はできていないということであった。外国語科目としての単位数増加が不可能な場合は、英語関連専門科目との連動が４年一貫した英語教育への取組の実現を可能

にするであろう。アカデミックスキルズに関しての言及はなかったので、今後プログラムにどう取り入れられていくのか、興味深い。

また、今回の視察は多読（Extensive Reading）とも関連する研究課題を目的としていたため、多読活動に関する質問もさせていただいたところ、多読用の教材は十分な部数を揃えているが、プログラムにどう取り入れるかはこれからの課題となっているとのことであった。

3．近畿大学語学教育部英語プログラムとの比較

3.1　プログラム概要の比較

近畿大学語学教育部が実施する平成20年度現在のプログラムは、平成18年度に開始した新カリキュラムに基づいている。表1は、このプログラムと九州産業大学のプログラムの比較を示している。

表1．九州産業大学と近畿大学の英語プログラムの比較

比較項目	九州産業大学プログラム	近畿大学語学教育部プログラム
プログラム開始時期	平成10年：改革元年 平成17年：全学共通英語プログラム成立・展開	平成18年：新カリキュラム開始
プログラム参加学部	全7学部	近畿地区6学部 （医学部・法学部・経済学部は別プログラム）
プログラム参加学生数	約3,000名	約5,000名
プログラム担当組織	語学教育研究センター	語学教育部
事務部体制	教務部一元化（同じオフィス内）	学部別教務部（別の建物）
クラス編成	学部横断習熟度別クラス （理系・文系・芸術学部の3系列で各系列は同日同時間帯の開講）	学科別習熟度別クラス （原則として学科ごとに開講。学科によっては分割または複数学科合併）
同日同時間帯の語学科目開講クラス数	40クラスまで可能（英語のみの時間帯の確保）	約20クラス
1クラスの人数	30人程度（20人にする予定）	30人程度

1週間の英語科目授業時間数	1年次・2年次： 日本人教員「英語」週1回 外国人教員「英語会話」週1回	1年次： 日本人教員「英語演習」週2回 外国人教員「オーラルイングリッシュ」週1回 2年次： 日本人教員「英語演習」週1回 外国人教員「オーラルイングリッシュ」週1回
英語履修単位数	4～10（国際文化学部は10単位以上）	8～12
目標	2年次終了時： TOEIC Bridge 140点	2年または3年次終了時： TOEIC 500点など科目毎に設定
プレイスメントテスト	TOEIC Bridge （大学負担で全学一斉実施）	語学教育部教員作成のマークシート式テスト（学部別実施）
テキスト	1・2年次：初級レベルのみ大学独自の文法テキスト 中級・上級は数冊の推薦テキストから選択	1年次：語学教育部教員作成のテキスト（2レベル） 2年次：3レベル各5冊の推薦テキストから選択
アチーブメントテスト	TOEIC Bridge：1・2年次の年度末（年1回、大学負担で全学一斉実施）	語学教育部教員作成のマークシート式テスト：前後期末 （年2回、学科別実施）
e-learningの活用	アルクネットアカデミー	アルクネットアカデミー

九州産業大学のプログラムで注目すべき点は、全学共通プログラムであること、文系、理系、芸術学部の3系列で学部横断時間割が実現していることである。九州産業大学では、1・2年次の徹底した全学共通プログラムの実践により、全学部に共通するEnglish for General Purposes（EGP）教育が可能となっている。

プログラムの具体的な内容では、①徹底した習熟度別クラス編成、②客観的評価の利用、③e-learningの活用が特徴的と言えよう。次に、これらの項目において、近畿大学語学教育部英語プログラムと比較する。

3.2　プログラム内容の比較

3.2.1　習熟度別クラス編成

近畿大学語学教育部英語プログラムでは、基幹科目において、前期は語学教育部作成の

プレイスメントテストを、後期は語学教育部作成の前期統一期末テストを利用して、各学部内でクラス編成を行っている。

九州産業大学では、全学共通プログラム実践の中で、学部横断の時間割を組むことによって、レベルに応じたきめ細かい指導をより効率的に実現しようとしている。この時間割編成を可能に、また容易にしているのは、教務部が一元化されており、同じオフィスで仕事をしているという体制であろう。

学生数や組織の違いを考えると、九州産業大学の方法が近畿大学に適するとは必ずしも言えないが、習熟度別クラスのレベルの均一化は近畿大学英語プログラムでの今後の課題であろう。

実際、近畿大学も学科別という現状であっても、基幹科目（英語演習・オーラルイングリッシュ）については、九州産業大学と同様に、点数による細かいクラス分けを行っている。使用するテキストは2種類ではあるが、レベルに応じた進度や指導内容の工夫がされている。ところが最も学生のばらつきが多いのが、一番上のクラスという状況となっており、平成20年度の新田のクラスでは、12月に実施したTOEIC IPテストで、25人中一番上位が850点、下位が300点台という結果であった。この現状では習熟度別クラスとして効果的な指導がほとんど不可能な状態であるため、均一的なクラスの創設が必要である。

そこで、21年度からは、経営学部で学科を横断したスーパークラスを開講することとなった。プレイスメントテストの上位20名の少人数クラスで、普通の英語演習クラスと異なるテキストで、発信能力により焦点を当てた指導を行う予定である。22年度以降、他学部での実施も検討している。九州産業大学ほどのきめ細かなクラス分けは無理だとしても、できるだけの均一化は図っていきたい。

3.2.2　客観的評価の利用

九州産業大学では、TOEIC Bridgeの全学的な複数回導入により学生の受信型スキルの客観的評価が可能になっている。近畿大学語学教育部英語プログラムでは、後期にTOEIC受験の選抜試験を行い、選抜者はTOEIC IPを無料で受験できるという体制をとってきたが、外部テストを利用した客観的評価と授業との連動は徹底されていない。

近畿大学語学教育プログラムで統一的に行っている英語力評価としては、基幹科目（英語演習）と一部の発展科目（TOEIC関連科目）で実施している、語学教育部作成のマーク式統一テストが挙げられる。ただし、膨大なデータをもとに作成された信頼性の高い市販テストと、いくら工夫したテストといっても教員作成のマーク式テストとでは、妥当

性・信頼性の面では太刀打ちできない。TOEIC（リスニング・リーディング）やTOEIC Bridgeでは、発信型能力であるスピーキング能力・ライティング能力の育成や測定については限界があり、また、大学生にとって適切な評価ツールであるかどうかは議論の余地があろう。しかし、具体的な目標を設定して複数回TOEIC Bridgeを受験することで受信型能力の客観的測定を行い、成績の着実な向上を実現している九州産業大学での試みは、近畿大学英語プログラムでも大いに参考にしたいところである。

一方、九州産業大学のプログラムでもそうだが、教員独自の期末テストとマーク式のアチーブメントテストの両方を実施することの意義も考慮したい。近畿大学では、マーク式統一テストが行われている上記の科目でも、教員独自の評価も全体の評価の中で重要な位置を占めている。教員独自の評価部分については、担当教員作成の記述式期末テスト、担当教員作成の小テスト、あるいは、テキストに含まれているマーク式テストを利用しているクラスなど、さまざまである。マーク式テストは受信的な知識の一部を測定するテストであるので、いかに優れた信頼性・妥当性の高いテストであっても、学生の多様な能力をすべて測定することは不可能である。よって、マーク式テスト以外の手法による評価も実施していくことが必要であろう。

なお、九州産業大学の全学共通英語教育プログラムの大きな特性である「数値目標の設定」は、時代の要請であろう。学生への動機づけという点からも、明確な数値目標と明確な「できること」リストの提示は不可欠である。「何ができるか」「何点に到達したか」の自覚と達成感が、学生の学習の継続化に結びつくであろう。

ここでは何かしらの「報酬」を与えることも効果的である。九州産業大学の「目標点数達成者対象の海外集中英語研修と企業インターンシップ」は非常に魅力的である。奨学金授与というメリットのみならず、海外での経験、特にインターンシップは学生にとって貴重な体験になると思われる。

3.2.3　e-learningの活用

九州産業大学ではアルクと共同でアルクネットと連動した初級者向けの教科書を開発したり、アルクネットの内容を活用したミニテストを作成・実施したりするなど、教室外でのe-learningを教室内活動に結びつける工夫を凝らしている。

近畿大学においてもアルクネットが本格的に稼働している。22年度開始予定の新カリキュラムのプログラムでは、このような授業外での活動を最終評価に組み込んだ形で取り入れることを提案したい。学習時間の確保と学習習慣の定着はゆとり世代にとっては不可

欠であると思われる。

また、九州産業大学で行っているように、授業外活動を授業内活動に結びつけるミニテストの導入も検討したいところだ。授業外で行う e-learning が授業内活動に反映されることで、授業内外活動双方に対する動機づけを高めるのに役立つであろう。また、授業開始時に 10 分間のミニテストを実施すれば、遅刻防止にもなろう。

4．おわりに

ともすれば、できるだけ学習時間を少なく済まそうとする学生がますます増加するなか、いかに学習時間を確保し、知識を定着させ、「使える英語」を身につける支援ができるかが大きな課題である。今回の視察において「e-learning ショック」や２年次終了時での成績アップという実績は、非常に有益なヒントとなった。この視察内容を今後のカリキュラム検討の中で生かし、注目される近畿大学英語プログラムを提供できるよう努力したい。

注

1) 「近大 Can-Do 枠組み（Kindai Can-Do Framework）」については、新田（2008）を参照。
2) リーディング・リスニング・スピーキング・ライティング・文法に関わる質問 80 項目からなるアンケート調査を学生に対して実施し、教員からは、担当クラスの学生の能力を観察したうえで収集した評価サンプル合計 773 人分をもとに、TOEIC Bridge のスコアが示す「できること」一覧表を作成した。
3) 学内研究助成金は、研究課題「Can-Do リストに基づいた語学教育部新カリキュラム－多読を活用したプログラムの構築－」に対するもので、研究代表者は語学教育部大村吉弘、共同研究者は Alison Kitzman、Thomas Koch、新田香織、下絵津子、George Truscott の計６名である。
4) 以下、九州産業大学の英語プログラムに関しては、視察の際の説明及び資料（佐護・吉田、2008：九州産業大学入学案内、他）と大学ホームページをもとにまとめている。

参考資料

九州産業大学（2008）『2009 年入学案内』：福岡

九州産業大学ホームページ：http://www.ip.kyusan-u.ac.jp/

Kyushu Sangyo University Language Education and Research Center（2009）「Kyushu Sangyo University English Education Program Teachers' Guide 2009」：福岡

佐護譽・吉田孝夫（2008）「全学共通英語教育による４年一貫した取組－実践的英語コミュニ

ケーション能力の育成を目指して－」九州産業大学語学教育研究センター：福岡
新田香織（2008）「近畿大学におけるスピーキング・ライティング統一テスト導入の必要性」『近畿大学語学教育部紀要』第8巻第2号、pp. 235-251.

付録：九州産業大学各学科における英語・英語関連専門科目

学部	学科	学生数／留学生数	ネイティブ専任教員／海外研修	英語科目	英語関連専門科目
国際文化学部	国際文化学科	男:198 / 23 女:182 / 25	あり／あり	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ 総合英語 イングリッシュコミュニケーション	英語コミュニケーション論・メディア英語・CALL演習・英語学・英語教育基礎・異文化間コミュニケーション・観光英語・児童英語教育・資格検定英語・英語文献講読・英語海外留学・英語ワークショップ
	日本文化学科	男:196 / 24 女:187 / 19	あり／あり	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ 総合英語 イングリッシュコミュニケーション	
	臨床心理学科	男:126 / 2 女:163 / 7	なし／あり	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ 総合英語 イングリッシュコミュニケーション	
経済学部	経済学科	男:1,912/ 15 女:163 / 9	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ	
商学部	商学科	男:1,505/ 29 女:209 / 11	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ	英検中級 英検上級
	観光産業学科	男:367 / 7 女:285 / 17	なし／あり 国外観光研修・観光インターンシップ	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ	TOEIC 観光外書講読 観光英語

経営学部	国際経営学科	男:744 / 38 女:149 / 27	あり／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ	実用英語 欧米ビジネス演習
	産業経営学科	男:829 / 27 女:109 / 15	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ	実用英語
情報科学部	情報科学科	男:511 / 3 女:38 / 0	あり／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ 英語表現法	
工学部	バイオロボティクス学科	男:154 / 0 女:4 / 0	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ 英語表現法	機械技術英語
	機械工学科	男:399 / 4 女:1 / 0	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ 英語表現法	機械技術英語
	電気情報工学科	男:364 / 4 女:4 / 0	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ 英語表現法	技術英語
	物質生命化学科	男:243 / 0 女:51 / 0	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ	化学英語
	都市基盤デザイン工学科	男:245 / 2 女:10 / 1	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ 英語表現法	技術英語
	建築学科	男:400 / 2 女:70 / 0	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ 英語表現法	技術英語
芸術学部	美術学科	男:109 / 1 女:188 / 2	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ	
	デザイン学科	男:328 / 2 女:431 / 2	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ	
	写真映像学科	男:191 / 2 女:127 / 5	なし／なし	英語Ⅰ～Ⅷ 英語会話Ⅰ～Ⅷ	

（九州産業大学ホームページ及び2009年度入学案内を参照して作成：データは平成20年5月）